

毎月11日掲載

防災・減災のページ

外国人の災害対策

河北新報社は3月18日、通算76回目の防災巡回ワークショップ「むすび塾」を気仙沼市で開いた。外国人の災害対策がテーマで、市内に住む中国、韓国、台湾、フィリピンの4カ国・地域の出身者や支援者ら7人が参加。異郷で遭遇した東日本大震災を振り返り、津波や言葉の壁に戸惑った経験を共有、今後の備えに教訓として生かそうと誓った。

外国人の災害対策

韓国ソウル出身の熊谷優美さん(55)は経営する料理店が津波で流されたという「津波」という言葉を知らなかったし、どんな災害なのかも分からなかったと話した。余震発生時、避難場所がどこにあるか分からず、苦労したとも語った。

フィリピンから来て20年の伊藤チャリトさん(48)は、震災時に避難を呼び掛けた防災行政無線に言及。「来日して間もない仲間は理解できない言葉だと思った。避難できるかどうか心配だった」と振り返った。

第76回ワークショップ @気仙沼



むすび塾

「津波」「避難」「高台」分からず混乱

言葉や体験の共有大切



震災時の困難を思い起こし、今後の対策を話し合う参加者。3月18日、気仙沼市役所

【災害に備えて】震災時働いていた水産加工会社では毎年、避難訓練をしており、避難場所が分かっていた。職場での対策は重要だ。当時の経験を語り継ぐことも大事。担当している地域のラジオ番組などを活用し、災害への意識を高めるよう呼び掛けた。伊藤チャリトさん(48)

【災害に備えて】日本に来て25年になる。気仙沼には震災後、被災地支援のため移住した。普段接する外国人は地震や津波など災害の知識が乏しいの比べ、夫を含めて日本人は防災意識が強いと感じる。地元言葉や習慣、文化を学んで地域に溶け込み、備えの意識を高めた。伊藤チャリトさん(49)

【震災を振り返って】気仙沼に住んで27年になる。義母から地震があったら津波「逃げたら絶対戻らない」と繰り返し教えられてきたので、震災時でも高台に避難できた。大船渡にある墓参りの際、昔の津波犠牲者の慰霊碑の説明を聞いていたこと、早い避難につながった。主婦・菅原結花さん(49)

【災害に備えて】日本語がまだ十分に話せない。防災について知らない言葉も多く、自分一人だけでは不安がある。支援してくれる人に力を借りた。これから気仙沼に来る同胞たちには自分の震災経験を紹介し、地震や津波への備えが大事と伝えたい。韓国料理店経営・熊谷優美さん(55)

【参加して】出身地の東京から気仙沼に移り住み、言葉を使った意思疎通の大切さを実感していたので、外国人向けの日本語教室を仲間と運営してきた。日本で一生懸命に暮らす外国人のため、改めて活動に力を入れたと思うようになった。ボランティア団体「はまろう会」代表・若手優子さん(71)

【災害に備えて】地域に共に暮らす隣人として外国人の防災を考える姿勢が大事。日本語を習得した先輩外国人と来日して間もない外国人を結び付け、経験を分かち合うことが大切だと感じた。私も津波災害などへの意識を高く持ち、備えの在り方を啓発していきたい。「はまろう会」会員・渡部千鶴子さん(71)

【外国人への期待】一方的に支援を受ける立場とみられがちだが、易しい日本語を使うなどすれば支援する側にも回る。今後、技能実習生を取り込んだ多文化共生を図るためにも、今回の出席者たちが指導的な役割を發揮してほしい。元「気仙沼市小さな国際大使館」国際交流員・村上伸子さん(53)

「高台」といった日本語が外国人にはあまり一般的ではないと指摘。「高い場所へ逃げる」という自然な日本語に置き換えてはどうかと提案した。

「避難場所を分かりやすく示す大型の地図や案内板が必要」との意見も相次いだ。防災環境の改善を求めつつ、外国人が積極的に地域に溶け込むことが大切との声も上がった。台湾出身の菅原結花さん(49)は自身の経験を基に「地域の人に顔を覚えてもらえば言葉も覚え、災害に関する知識も自然と身に付く」と提言。熊谷さんは「これから

東北大災害科学国際研究所 来る外国人に自分たち先輩がの保田真理講師(62)も「外国経験を伝えていきたい」と伝承への意欲を語った。「震災はまだ終わっていない。私たちが意識を高くしてつなぐ場づくりや防災学習会をいきたい」と伝えたのは、外に呼び掛けた。

東北大災害科学国際研究所 来る外国人に自分たち先輩がの保田真理講師(62)も「外国経験を伝えていきたい」と伝承への意欲を語った。「震災はまだ終わっていない。私たちが意識を高くしてつなぐ場づくりや防災学習会をいきたい」と伝えたのは、外に呼び掛けた。

外国人と言っても、地震がほとんどない国から来た人もいれば、海がなく津波とは無縁の地域の人人もいる。災害や防災の知識は日本人と必ずしも同じでないこととして、住民登録

外国人と言っても、地震がほとんどない国から来た人もいれば、海がなく津波とは無縁の地域の人人もいる。災害や防災の知識は日本人と必ずしも同じでないこととして、住民登録

交流の延長で勉強会を

【助言者から】
菊池 哲佳さん(44)
多文化社会コーディネーター
10年以上、宮城県内の外域にいるかどうかも鍵になる。同じ地域に生きる住民の訓練を行ってきた。防災や災害の知識を外国人に持つための場をつくらなければならない。私たちが

助言者から

菊池 哲佳さん(44)

多文化社会コーディネーター
10年以上、宮城県内の外域にいるかどうかも鍵になる。同じ地域に生きる住民の訓練を行ってきた。防災や災害の知識を外国人に持つための場をつくらなければならない。私たちが

難しい用語言い換えて

【助言者から】
保田 真理さん(62)
東北大災害科学国際研究所講師
外国人に防災教育や防災訓練を行ってきた。防災や災害の知識を外国人に持つための場をつくらなければならない。私たちが



【震災犠牲者23人超】東日本大震災で犠牲になった外国人は、外務省外国人課の統計(2011年4月12日現在)によると23人で、国籍別では韓国・朝鮮10人、中国8人、米国2人、フィリピン、パキスタン、カナダ各1人。公式確認されていない例もあり、実際は数多いとみられる。阪神・淡路大震災の外国人犠牲者は174人に上った(兵庫県警)。住民に占める外国人の割合が神戸市中心に高い上、「東日本大震災は平日の日に発生し、企業や学校管理下で避難誘導された例が多かった

【参加して】出身地の東京から気仙沼に移り住み、言葉を使った意思疎通の大切さを実感していたので、外国人向けの日本語教室を仲間と運営してきた。日本で一生懸命に暮らす外国人のため、改めて活動に力を入れたと思うようになった。ボランティア団体「はまろう会」代表・若手優子さん(71)

希望を受け付けています。連絡先は河内北新報社防災・教育室022(271)1591。次回のむすび塾は22日、宮城県七ヶ浜町で開催します。